引き継がれるこころ
福祉人育成に向けた新たなる旅立ち

本年の5月1日付けで、理事会の承認をもって、滝波博純に代わり髙村昌裕が足羽福祉会理事長に就任いたしました。ここで新旧理事長からごあいさつを申し上げます。

退任のごあいさつ

本当に永年にわたり、ご厚情ご支援をいただき、ありがとうございました。お付き合いの中で、いろいろなことが教えられ、また、課題を与えていただき、多くの取り組みができたことが何よりの励みでした。

お陰をもって、これからも更なる進歩を続けていくことを確信しています。

生活の基盤の安定と幸せが永久に進められますよう、地域の皆様と共に信頼される法人であり続けることを祈って、退任のお礼といたします。

ありがとうございました。

平成22年5月
前理事長
滝波博純

新任のごあいさつ

この度、足羽福祉会理事長という大役を仰せつかることになりました。法人創立以来42年、職員数が３００人を超え、８００人近い利用者様へのサービスを提供するにいたる、この法人を担っていくことに、身の引き締まる思いをいたしております。何とぞ皆様のご指導、ご鞭撻（べんたつ）のほどよろしくお願いいたします。

さて、多くの福祉系の学生さんと同じように、私も二十年ほど前の学生時代に、援助を必要とされる方々へ、さまざまな形でのボランティアや実習を体験しました。重い障害がありながら地域で一人暮らしをされている方々への生活支援、視覚障害を持つ方々のマラソン伴走やスキー合宿、海外旅行の同伴、24時間型訪問介護現場での実習、障害児の夏休み一時預かりサークル活動などなど。それらの体験を通して、私は多くの福祉従事者やボランティアの方々と出会い、言葉を交わし、障害があってもなくても当たり前に生きていける社会（ノーマライゼーション）の実現がいかに大切であるかを肌で感じたものです。

しかしながら、今、ノーマライゼーションが実現したかというと、まだまだ課題もあります。

特定の場所・設備で行う福祉から地域の中で行う福祉へ、集団への指導・援助から一人ひとりに寄り添い、尊厳を保つ本人主体の福祉へと、明らかに社会の価値観は転換してきています。少なくとも「福祉が特別なもの」という感覚はなくなってきたように思います。

一方で、認知症やさまざまな障害のある方々への援助方法は、医学や現場での臨床知見の向上によって、より専門性が求められてきており「特別な福祉」の重要性も痛切に感じております。

つまり、人としての当たり前の（ノーマルな）感性と専門性に基づく特別な（スペシャルな）技術、両方の質を高めていくことが、我々福祉従事者に求められていると思うのです。こうした「福祉人」育成こそ、我々足羽福祉会がめざすところだと考えております。

まだまだ未熟者ではございますが、利用者の皆様、ご家族の皆様、地域の皆様と同じ目線で私どもの理念追求をめざし、この地域に「足羽福祉会があってよかった」と思っていただけるよう、誠心誠意取り組んでまいります。どうぞよろしくお願いします。

平成22年5月
理事長
髙村昌裕